座右を探りて、陛下の略傳を書ける英文の小篇を得、即ち補譯して之を本誌に登載す、敢て女皇の傳を立つといふにあらず唯讀者とともに、同情の涙を分たんとてなり。

第一　女皇の幼時

女皇は一千八百十九年四月十九日、ケンシントン城に降誕し給ふ、父なるケント公爵は、先きにゼルマンに住ひけるが、その夫人の姙娠せるを以て、本國なる英國に歸りて分娩せしめんと思し立ちて、急に歸國し給ひ、さてケンシントンにと入城したるなり。

やがて、公爵夫人には、やすやすと出産し給ふ父公爵の喜悅斜めならず、其年の秋の暮に、公爵は一家をシドマスに移しぬ、生兒の健康に適當なる地なりとありてなり。

（以下次號）

文苑

車のわだち（承前）

擊水生

▲この正月、朝より來合せ居たりける賀客の漸く辭し去りたる二時過ぎ頃、出入りの車屋の親分、年始にとて來りぬ。取り散らしたる盃盤を片付けさせながら、吾は更に屠蘇祝はゝん程に今少し、こちらにと招げば彼は近く進み、恭しくぬかつきて、祝詞を述べぬ。

『どうだね、車屋さん、去年は、しつかり儲かつたかね。』

『へゝゝゝゝお蔭さまで……併し、どうも實申し上げりゃ駄目でございましたな。もう、私も御覽の通

り年は取りますし、何かほかに、いゝ商賣を見つけ出して商賣換を致したいと思つていますんですが、矢張どうも、考が付きませんので、こうやつて懇圖々々致して居ります樣な次第で、へゝゝ』

『ハゝゝゝ併し、何も年とつたからつて商賣換するにも及ばないじやないか、大勢若い者を使つて居れば』

『イヤ旦那駄目です、やつぱり、自分からさきに立つて働きませんでは若い奴らだつて動きやしませんし、夫に雨でも降るとか雪でもちらつくと來た晩なぞはどうしたつて自分から草鞋引つ懸けて出なくつちやあ、どつても駄目ですね――……そりや勿論餘計に働いた奴には餘計にやるのですがね、それでも、いけませんや。ですからこんな商賣は年とつてからは、つまりませんのです、へえ』

『貸し車も、やつてるだらう』

『へえ車も貸します……ア、車貸すので思い出しましたがね、おかしくもあり可愛想にもあるのは書生樣なんですな……なあに大抵夜分ですがね、そーです、毎晩四五人も來ます。貸賃ですか、貸賃は一臺で五錢から六錢です、尤夜分ですし、夫に相手は書生さんでなれませんから、新しい車など貸ては駄目ですから、まあ古いのを貸てやるんですが、……そりやおかしいですよ、宵のうちチャンと羽織を着ましてね、書生下駄をはいて私ん所へ、やつて來まして、そこで例の法被と着代へるんですが、中には泥除をさかさにつけて内の若い奴らに笑はれたりなんかしまして……』

彼は今しも注ぎやりたるコップを取り上げて、グッと一口喉に潤しながら、さらに言葉をつゞけて

『この間もおかしかつたことは、一人の書生さんが支度をして出かけたんですが、暫すると途中から引返して來ましてね、どーも足が大變に痛んでと仰いますから、一體どーしたんですと言て、よく〳〵見ますと、面白いじやありませんか、草鞋をねー旦那まるで、さかさにおはきなすつてるのですもの、夫から女房の奴が出てはき方を敎へてやるやら、致しまして、やつとのことで出て行きましたんでげすがね、……夫でも感心に衝突もしないで、無事に、一時ごろになると皆返つて參りますよ。一晩にどれほど儲けるかと仰るんですか……そーです、きまりませんが大抵多い時で、五六十錢少い時でも、二十錢やそこいらは、取て御返りの樣です、尤中には、あんぜり遲〳〵なつて明日のお稽古にさし支へるといけぬといふので、十一時ごろにお歸りになる方もありまするですがね。……』

過ぎし雪の夜半、夏の宵のことども思ひ起されて得知らぬ感慨に打沈みたる吾は、默然として聞き居たりしに、彼はノベッに喋り續けて、いさゝか勞れたらんが如く、やをら、銀の煙管を取り出して、悠然と一服ふかしながら。

『ねー旦那私あ、それで、つね〳〵思つて居るんです。まあ世の中には隨分贅澤にお金を送つて貰つて、夫れで勉强もなさらないで、學校もお留主にして、せつせと惡所通などなさる書生さんたちが、大變にある相

で、新聞などにも折々見えるといふ話なんですが、又一方を見ますと、夜は寢ないで、こうやつて私ん所の車なんぞ引いて、お金を儲けてそれで晝になると御休みもなさらないで毎日學校に出て御稽古なさるといふなんざあ、すばらしい剛氣な書生さんとやありませんか。それで、どうか、こんな書生さんのお話を、ねー旦那、あの道樂書生さんたちに、聞かしてやつたらと思つて居りますのでへえ」

今しも、彼が、親分的俠氣を以て、まさに、滿腔の氣焰を吐き出さんとせる時、また〳〵玄關に賀客の來訪せるありければ

「いや、どーも大變に長座を仕りまして……」

なる一語を殘し匆々にして立ち歸りぬ。　（完）

夜の梅

東くめ

夜寒の風の　吹み入りし、
冬のつらさを　忘れよと、
閨の板戸の　ひまもりて、
軒の梅が香　かよふなり、
かたしく袖も　かをるまで。

母を戀ふ

さくら

「父母より遠く遊ばず」の　聖のをしえ打そひき
吾妻の空をこゝろざし　出しは去年の夏なりき
三百里外に母はあり　馴れし家をば立ち出でゝ
去年の葉月の末つかた　孝養の日は終になし
又の旅寢のかりまくら